

介護と仕事の両立

田窪セツ子氏が30歳代後半にさしかかった頃、同居する義父母の介護がはじまった。最初に、義父が脳梗塞を患い、介護は4年間ほどつづいた。そして、50歳代後半から義母が認知症を患い、介護は7年間ほどつづいた。

仕事をしながら家事・子育て・介護をほぼひとりでこなすのは、物理的にも精神的にもかなりの負担である。しかし日本の場合、子育てや介護を含めた家の問題に対して女性に依存する傾向にある。しかも、田窪氏の場合は義理の両親と同居していたこともあり、血のつながらない他人であっても介護は「嫁」の仕事である。いまでこそ、核家族化が進み、介護や子育ての「福祉の外部化」がある程度充実し、女性の負担は軽くなったとは言え、家事を負担するのはやはり女性が多い。

「家事・育児・介護時間」の男女別推移（週全体平均）をみると、女性の場合1996年から15年間ほぼ横ばいの約215分で推移しており、2016年の時点で208分に少し減少している。男性の場合は1996年から2016年にかけて24分から44分に増加しているが、女性に比べると圧倒的に「家事・育児・介護時間」に費やす時間が短いことがわかる（男女共同参画局「第1節『家事・育児・介護』と『仕事』のバランスをめぐる推移」『男女共同参画白書』令和2年度版）。

田窪氏にとって、とりわけ義母の介護には苦勞した。毎日、食事やトイレ、入浴の介助など日常生活全般の世話をしながら仕事をつづけ、精神的にかなり辛い時期を過ごした。挫けそうになったときは何度もあった。それでも田窪氏は前向きに、認知症について勉強会に参加したり、講演会に足を運んで話を聞いたり、どうすれば義母も自分も楽になるのかを考えた。トイレ介助がもっとも大変だったが、「自分が選んだ道だし、わたしの親も義姉にみてもらっているんだから」と自分に言い聞かせ、腹を立てないように懸命に努めた。

長い間、義理の両親の介護でたいへんだったが、仕事を辞めようとおもったことはない。介護で不測事態が起こったときに早退したり休暇をもらったり、会社には迷惑をかけたが、このことが返って「お世話になっているから、がんばらんといかん」と自分を奮い立たせる理由になった。しかし、田窪氏は言う。「やっぱり田中産業は魅力があったんやね。いまの職場はすごく自分でもいいなとおもうんですね。」

4. 人材育成

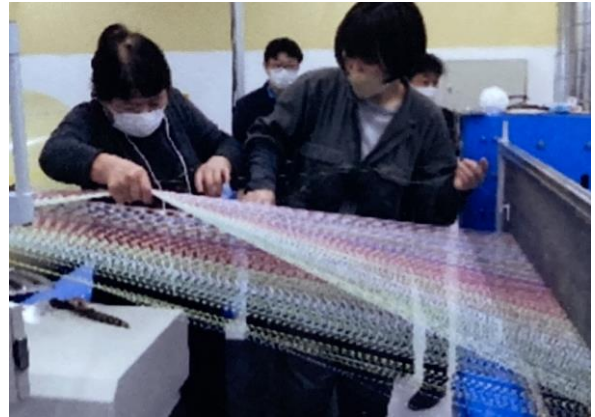
田窪氏は、2017年から田中産業で後進の育成に力を注いでいる。教え子はこれまで30人ほどを数える。

愛媛県立産業技術専門校のうち愛媛中央産業技術専門校の今治タオルものづくり科（定員10名、期間2年）では、タオルづくり全般に関する専門知識や技術を修得することができる。同科の修了生はおもに地元のタオルメーカーに就職し、今治タオル工業の維持・発展に貢献している。田中産業でも修了生を採用している。

今治タオルものづくり科では、タオル製造に関わる一連の工程を学べるが、整経について専門に習うわけではない。そのため、タオルメーカーに入社して整経の担当になると、改めて整経の技術を深いところまで学ばなければならない。整経で独り立ちするには、ある程度の時間を要する。比較的シンプルなデザインのタオル向け整経では3年、ジャカード織機を使った複雑なデザインのタオル向け整経では少なくとも5年はかかる。一人前になるまでは田窪氏のような熟練者が側にいて、整経長や通し幅、経糸の総本数、緯糸の分量など糸量の正確さを確認したり、万一糸量を間違えて作業を進めてしまった際の修正をおこなったり、サポートが必要である。

田窪氏は、新規の整経担当者には、粹立ての仕方から指導し、糸の計算方法もみっちり教える。暗算で数値を出していくのが通常であるが、この暗算が難しく根を上げる人もいる。


現在、田窪氏は、田中産業入社5年目の御堂友里乃氏と3年目の渡部美穂氏に技術指導をおこなっている。御堂氏と渡辺氏は、「整経ペレーター」（最近では「伸ベ士」を「整経オペレーター」と呼ぶ）として日々研鑽を積んでおり、将来は田中産業、さらには今治タオル工業の将来を担う頼もしい存在である。



田窪氏（左）と御堂氏（右）



伸ベ士として将来を背負って立つ
御堂氏（2023年11月2日撮影）

2023年6月1日に放映された（株）ジャパネットたかた  のテレビショッピングでは、田窪氏と御堂氏が田中産業のタオルケットの製品説明で登壇した。整経の技術がタオルの品質を左右することを考えれば、整経のプロフェッショナルによる製品説明は納得の

いく人選である。

専門学校や高校を卒業してタオルメーカーに入ってきた新入社員のなかにはコミュニケーションが苦手な若者もいる。田窪氏はそんな若者でも「任せてください」と言って迷いなく引きうける。田窪氏には不思議と「人を包み込むような温かさ」があり、落ち着いた声のトーン、柔らかな顔の表情、話しかけるタイミングによって相手に安心感を与える。一方で、厳しく教えるときもある。指導にマニュアルなど存在しない。田窪氏は、いつもいろいろと悩みながら、そして考えながら、一人ひとりに真摯に向き合っている。



「ジャパネットたかた」での撮影風景

5. 若者へのメッセージ

「今治におるかぎり、仕事はある」

「女性にはぜひ手に職をつけてほしい」と田窪氏はおもう。自らが整経の技術を極めることで、納得できる人生を歩んで来たからこそそのメッセージである。「今治におる限り、仕事はあるので、粘り強く技術の研鑽に努めることで道は拓けます。整経の仕事をしてきて、辞めようとおもったことはあるけど、つづけて良かったのは、年をとっても仕事があることですね。技術という大切さをいましみじみ

感じています。」

また、田窪氏は、「仕事が楽しくなるような環境づくりを心がけなさい」と、若い人たちに日頃から言っている。タオルづくりは細かな分業で成り立っており、各工程にはさらに分化した協働作業がある。しかし、生身の人間と一緒に仕事をしていると気に障るときもある。そんなときは、「人の良いところをみつけてあげんといかんよ。欠点だけみてたらダメよ。嫌な雰囲気の中かで辛い顔をして働いてもうらお金も、笑いながら楽しく働いてもらうお金も変わらないから、朗らかに仕事しましょう」と若い世代に伝えている。

田窪氏が後進の指導においてつねに念頭に置いているのは、いい仕事をするためにも「楽しく雰囲気のいい職場づくり」である。

（次号につづく）

